HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	野村恭史『ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界―『論考』の生成と崩壊』（ナカニシヤ出版、二〇〇六年）
Author(s)	吉田, 寛
Citation	哲学, 43, 84-90
Issue Date	2007-07-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/35046
Type	bulletin (article)
Note	書評
File Information	43_RP84-90.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《書評》

野村恭史『ウィトゲンシュタインにおける言語・論理・世界 ――『論考』の生成と崩壊』（ナカニシヤ出版、二〇〇六年）

吉田　寛

『論理哲学論考』（ウィトゲンシュタイン、一九二二年）は、分析哲学の古典的著作であるとされながら難解で知られている。本書は、この『論考』の理論哲学を意味論的存在論として受け取る。そして、その生成と崩壊の過程をふくめて総合的に解明することで、『論考』の哲学的立場を明らかにしようとする解説書である。また、本書は著者によって２０００年に北海道大学に提出された同名の学位論文を、コンパクトで読みやすいものにまとめたものであるとされる。このような目的と事情を反映して、本書は手堅く専門性の高い研究書・解説書であるという性格を有している。

全体として本書は、『論考』の大部分を占める言語論について、詳細で整合的な解説を与えている点、従来の解釈上の基本的論点を解説しつつそれぞれについて著者なりの解答を提示しているという点で、研究書としても解説書としても成功していると言えるだろう。そこで本書は、一つの『論考』解釈として評価されうるとともに、それを専門に研究する者以外にとっても『論考』理解の有益な手がかりになると思われる。

近年わが国でも『論考』や前期ウィトゲンシュタインの思想に関する本が何冊か出版された。これらは、いずれも

単なる入門書ではなく、それぞれの著者がそれぞれの仕方で『論考』を受け取り、独自の解釈を示そうとしたものである。そのなかで本書のアプローチが持つ特色は、以下の二点にあると思われる。まず、本書は『論考』を意味論的な存在論を提示した本として受け取ろうとする。そして次に、『論考』の基本的概念について、現代論理学における形式的道具立てを利用しつつ解明していくというアプローチを採用している。このようなアプローチによって本書は、『論考』の言語論が、一つの整合的な意味論的存在論として、すなわち独特の世界観・言語観を提示する議論として、理解可能であることを示そうとしているのである。

まず、本書の議論をざっと通覧しよう。

第一章では『論考』のウィトゲンシュタインが、その先行者であるフレーゲとラッセルから引き継いだ基本的アイデアを確認している。すなわち、ウィトゲンシュタインは、まずフレーゲからは存在論の方法としての言語分析という基本戦略を引き継いでいることが確認される。ついで、ラッセルのタイプ理論への根本的な批判を通じて、「論理形式」や「単純な対象」という『論考』における基本的概念が形成されたことが確認される。

第二章では、「像の理論」として知られる『論考』の言語論において骨格をなす議論が整理される。「像の理論」とは、「言語」について、それを特定の状態を描きだす「像」として説明しようとする理論である。ここで問題になるのが「形式」概念である。『論考』によれば、「像」はその描き出すものと「形式」を共有することでそれを描き出すことができるとされている（2.17）。だが、その「形式」概念については、『論考』では一貫した仕方で説明が与えられてはおらず、しばしば解釈上の混乱を引き起こしてきた。そこで著者は、『論考』の「形式」概念を「描出の形式」「写像形式」「結合形式」「論理形式」など6つの概念に分節化し、それら相互の関係を整理している。

これらの下準備を踏まえて、第三章～第四章で、『論考』の言語論の解説に取り掛かる。すなわち、『論考』の想定

する言語を、現代論理学の道具立てを利用して再構成するという手法で、その言語論が解明される。まず、三章で『論考』が「完全に分析された言語」(3.25)と呼ぶ完全言語LWについて、名から要素命題の構成、要素命題から命題一般の構成、という順に形式的に構文論が与えられる。ついで四章で、この言語LWの実例であるミニ言語LWxについて、可能世界意味論や真理条件意味論の道具立てを用いて形式的に意味論を与えていく。こうして『論考』の言語論を形式的に整理することで、『論考』の言語論における「像」「形式」「意義」「名」などの基本概念を整合的に理解する道を確保する。

第五章では、上で解明された意味論において「世界の実体」をなすとされる「単純な対象」概念について著者の解釈が示され、いよいよ『論考』の存在論の内実が解明される。『論考』における「対象」が何であるかについては、ウィトゲンシュタイン自身が『論考』出版以前から頭を悩ませていた問題であり、また『論考』出版以後にも解釈論争の中心的な論点となってきた。著者は、前章までの議論で明らかにされた意味論上の諸条件を「真正面から」すべて受けとめ、それを満たす解釈として、『論考』の「対象」とはセンス・データのタイプであるという独自の興味深い見解を示している。そして、『論考』の「世界」とは、「私」のセンス・データの世界として純粋に私的な世界でありその外部が考えられることはないが、その世界は同時に日常言語の完全な分析によって与えられる世界として客観性を持っているはずだという一種の予定調和的な解釈が示される。

つづく第六章では、『論考』のいわゆる真理関数論的な「論理」理解において、言語と世界との間の「論理形式の共有」という『論考』の基本テーゼが確認される。そして七章では、『論考』後約一〇年を経て哲学に復帰したウィトゲンシュタインの「現象学」の試みにおいて、この二つの要請が維持できないことによって、ウィトゲンシュタインにおいて『論考』の言語論が変質し解体していく過程が整理される。

以上の解明を通じて本書は、従来からさまざまな解釈が提示されてきた『論考』の言語論に対して、整合的な一つの解釈を与えたと言えるだろう。特に注目すべきは、要素命題の相互独立性の要請、「単純な対象」とは何かという解釈上の難問に正面から答えつつ、矛盾のない総合的な解釈を示した点であろう。『論考』解釈としてのこの論点は、本書の一つの山であるゆえ、以下でその議論を簡単に敷衍しつつ、論評していきたい。

要素命題の相互独立性の要請とは、『論考』の以下の命題で提示されている主張である。

4.211　要素命題の特徴は、いかなる要素命題もそれと両立不可能ではないことにある。

5.134　ある要素命題から他の要素命題が帰結することはない。

だが、『論考』における要素命題は「単純な対象」同士の結合による事態を描出するとし（**4.21**）、またその「対象」同士の結合可能性が「対象の形式」によって限定されている（**2.0141**）なら、要素命題は相互に独立ではあり得ないようにも思われる。とくに、「単純な対象」をセンス・データとみなそうとする解釈は、「色排除問題」と呼ばれる議論にあからさまに突き当たることになる。

6.3751　たとえば二つの色が同時に同じ場所を占めることは不可能。しかも論理的に不可能である。

つまり、例えば「Aは赤い」のような命題が要素命題であるとすると、もし「Aは赤い」が真であれば、「Aは青い」は必然的に偽となるだろう。なぜなら、一つの対象が同時に赤くかつ青いことはあり得ないからである。このとき、要素命題は相互に独立していないことになる。

このような議論の道筋から、『論考』における要素命題の独立性を保持し、かつ同時に「対象」をセンス・データとする解釈は、従来より困難であるとみなされてきた。

これに対して筆者は、色空間を相互に独立に切り分ける命題を要素命題として採用するようなセンス・データ言語

を考察し、これを例として「対象」をセンス・データであるとしつつも、同時に要素命題の相互独立性の要請を満たすような解釈が可能であるという議論を提示している（pp.189-195）。著者によれば、『論考』の言語論は、こうした解釈を一般化することによって、「対象」をセンス・データであると見なしたとしても、色排除問題のような問題に抵触せずに生き残れる可能性が確保される（p.202）。

この解釈は、確かに形式上可能であり興味深いものであると思われるが、『論考』の解釈としては著者自身が「奇妙さ」を指摘しているように、不自然であり、やや無理があるように思われる。というのは、この解釈において「対象」として認定されているものは、「赤」や「青」のようなわれわれの認識的な単位とはかけ離れたものになってしまっており、それはセンス・データの世界を「経験の世界」と考える（p.203）筆者の解釈にとっては望ましくないことであろうから。その不自然さを引き受けることで、『論考』の言語論を整合的なものとして受け取ろうとするのが本書における著者の選択であろう。

だが、その選択は合理的なものなのだろうか？　ここで評者が疑問を感じているのは、『論考』の言語論を整合的に説明する解釈を与えることができれば、果たして『論考』解釈としては成功だと言えるのかという点である。本書の示す全体的な筋書きは以下のようになっていた。『論考』への歩みは、フレーゲとラッセルから引き継いだ言語論的な課題に対して、ウィトゲンシュタインが整合的な解答を与えようとした試みとして整理された。そして、『論考』においては形式的には整合的な言語論が構成された。しかし、ウィトゲンシュタインの関心が「現象学」に進むにつれて、対象領域の有限性や要素命題の相互独立性といった「像の理論」の要請が維持できなくなり、『論考』の言語論は放棄された、というストーリーである。本書の中心的な努力は、このストーリーを再構築することに向けられている。もちろん、その努力とその成果は上述のように十分に評価されるべきである。

ただ、このストーリーによって、『論考』の言語論の解釈が一意的に定まるかと言えば、評者にはそうは思えない。例えば、著者は『論考』の「単純な対象」について、第5章ではそれはセンス・データであるとの解釈を苦労して示しているが、しばしば提案されてきたように「対象」が何であるかは『論考』では特に決定されていなかった（ex. Anscombe）と見なす解釈であっても、本書第二章～第四章にかけて示されてきた言語論に問題なく接続されうると思われる。「対象」が何でありえないかについては、意味論的存在論内部で決定することは可能だろうが、何であるかを特定するには意味論だけを参照するのでは不十分である。本書の議論が示しえたことは、意味論との整合性において、『論考』の「対象」はセンス・データであり得るということにとどまるであろう。私見では、この問題について妥当で説得力のある解釈を示すためには、『論考』における言語理解の理論、「私」と独我論に関する議論、「倫理的なもの」に関する議論、そして『論考』序文に示されているウィトゲンシュタイン自身の意図などを参照しなければならないだろうと思われる。

『論考』の眼目は、たんに矛盾のない言語観を提示することにあったのではなく、むしろ一定の意図とビジョンに基づいて、特定の言語観と世界観を提示することにあったのではないか。そこで、単に『論考』の言語論の矛盾を取り繕うだけではなく、『論考』全体を貫く意図やビジョンの中で一貫した解釈を示すことで、はじめて『論考』の妥当な解釈が得られると思われる。

じっさい『論考』は、その出版以来、これをどう読むかがクリティカルに問われてきた本である。本書は意味論的存在論として『論考』を読むというスタイルで貫かれているが、『論考』は必ずしもこのような態度でのみ読まれてきたわけではない。代表的な読み方だけでも、ざっと以下の立場がある。科学哲学や知識哲学の基礎的な仕事として評価した論理実証主義者たち、あるいはケンブリッジを中心として論理学の本として受け取ろうとした解釈者たちがあり、さらにカントに連なる超越論哲学の系譜に位置づける解釈、本質的に倫理の書として『論考』を受け取ろうと

する立場がある。さらに、この本は本質的にはナンセンスで何の理論も提示してはいないが、読む者に治療的効果を与える本なのであるという受け取り方が、近年北米を中心とする解釈者たちのあいだで話題になっている。

本書は、『論考』の言語論に絞って確かに整合的な解釈を提示しているが、もし『論考』の世界観を問題とするなら、本来言語理解の理論や独我論などの詳細な分析が必要だろうし、またそれに応じて上述のような『論考』という本全体の性格づけにかかわる議論は避けては通れないだろう。他方、もし『論考』の言語論について、言語の哲学としての一般的な哲学的立場を評価しようとするなら、現代の論理的構文論や意味論、言語の哲学などを広く俯瞰しながら、その中に『論考』の言語論を位置づけていく必要があるだろう。

後者については、著者自身が本書の末尾で指摘している（p.268）ことでもあり、本書で明らかにされたような『論考』に含まれる価値あるアイデアを現代にもたらすという意味でも、今後の展開が期待される。